

茅風



— Breeze from the field of thatch-grass —

2015年12月22日
森林塾青水
事務局便り
茅風通信 47号



「目玉茅ポッチ」

- 9月～12月の活動報告(事務局)1
- 一般参加歓迎プログラム2015 ④
「ミズナラ林整備と初秋の藤原探訪」
 - ◇開催報告(草野洋)2
 - ◇日光オプショナルツアー実施報告(草野洋).....3
- 一般参加歓迎プログラム2015 ⑤
「錦秋の草原で茅刈り・茅ポッチづくり」
 - ◇開催報告(草野洋)5
 - ◇参加者レポート(朱宮文晴・小沢律子).....7
- 一般参加歓迎プログラム2015 ⑥
「茅ポッチ運びだしと山の口終い」
 - ◇開催報告(草野洋)8
 - ◇参加者レポート(沖浩).....10
- 第3回東京楽習会「上ノ原の昆虫相」
 - ◇開催報告(稲貴夫)10
- 藤原現地報告(北山郁人).....11
- 麗澤中学校「樹木観察会・FW発表会」
 - ◇参加報告(高野史郎)12
- 協賛団体紹介 第一回「(株)町田工業」.....13
- 野守のつぶやき(清水英毅)14

編集後記 (敬称略)

■ 9月～12月の活動報告

【8月追記】

- 8月20日～22日 学芸大チームが全国草原の植生調査の一環として上ノ原訪問。これと並行して会員中心で21日～22日に昆虫調査、伐採跡地調査、草原の植物相調査を実施。
- 8月中 流域連携団体「バイプランアソシエイツ」主催東京湾サンセットクルーズに延べ25名参加。

【9月】

- 3日 麗澤大学と包括的な連携協定を締結。
- 6日 諏訪神社例大祭に招待あり、塾長ら参列。区長挨拶にて、森林塾への謝辞あり。
- 7日 『茅風通信』46号発行。
- 12日 麗澤中の研究発表会。藤原で行われたFWの結果発表あり。12頁参照
- 12日、13日 一般参加歓迎プログラム④「ミズナラ林整備」、首都圏12名および現地2名参加、間伐を見学、丸太の運びだし作業実施。県道刈払い奉仕。車座講座はふじわら昔語り。2頁参照
- 14日 オプショナルツアーで、日光の茅ポッチの会のフィールド見学。10名参加。3頁参照

【10月】

- 4日 みなかみ町新設10周年記念式典に参列。

- 24日、25日 一般参加歓迎プログラム⑤「茅刈」首都圏から27名、町田工業2名、地元5名参加。24日夜の車座講座は、藤原最後の茅葺き職人惣一郎さんのお話。岸みなかみ町長も聴講。併せてNPO奥利根水源地域ネットワークによる町の10周年記念事業「お散歩マルシェ」を楽しむ。5頁参照

【11月】

- 14日、15日 一般参加歓迎プログラム⑥「茅出しと山の口終い」14名参加。8頁参照(10月の茅刈、11月の茅出しの成果)
 - ・ボランティアによる茅ポッチ数98＝490束は藤原大芦の倉庫に搬入。
 - ・4人の藤原衆が刈った5,060束は町田工業に引き渡し。合計は5,550束
 並行して炭窯の炭だしがあったので多くが見学。車座講座では、仁三郎さんから奥利根の自然や山にまつわるよもやま話を伺う。

【12月】

- 12日 第3回東京楽習会開催。(株)プレック研究所の山崎先生が「上ノ原の昆虫相」と題して講演。20名が参加。10頁参照

(以上)

■一般参加歓迎プログラム 2015④ 「ミズナラ林整備と初秋の藤原探訪」開催報告 草野 洋

9月の定例活動は、12日・13日で12名参加。両日とも初秋らしいさわやかな天気でしたが、身体を動かすと大汗をかくような気温の中行われました。周囲の山々の紅葉はまだ早く、上ノ原のススキの穂はツンと上を向いて穂は赤味を帯び、風に舞う綿毛は未だできていません。これが10月には垂れ下がり、招くような尾花となります。

○上ノ原のススキ

ススキは全体的に元気がないように感じられ、心配しているススキの生育不良は今年も続いているようです。それに、ススキ以外の草の繁茂が激しくなったように感じるのは気候のせいなのか、富栄養化しているのか、その反対に長年の利用による衰退か、土壌分析をするなど早急な原因分析が必要です。



○ミズナラ林伐採・材運搬・散策

今回の作業は、伐採と伐採木の玉切りと管理道までの運び出し。

伐採は、昨年の試験地伐採箇所の隣接地を55株200本伐採する段取りでしたが伐採手が草野だけでしたので思うようにできませんでした。それでも、ニューチェーンソーを駆使してミズナラ、ミズキ、ハウチワカエデなど20本ほどを伐採・玉切りしました。このうち2本は川端さんが伐採しました。初体験ながら想定した方向に倒れました。

搬出は、昨年に伐採して残っていた材を運びやすい長さに玉切りし管理道脇まで運ぶ作業です。1年以上たって乾燥しているとはいえ、径20cmの重量物もあります。皆さん、抱えた



り、肩に担いだりの重労働です。黙々とやっていたら全体の半分程を運び出しました。これは、北山さん達NPOが作った石窯の炭焼き材として使います。11月には初窯で上ノ原白炭が生産されます。残り的大径材などは薪ストーブの薪として使います。重労働の割には達成感今ひとつだったかも・・・。



マユミの赤い実が鮮やか

重労働なのであまり長い時間は体の負担になります。力が残っているうちに切り上げて、木馬道を散策した後、秋の夕日に赤く染まったススキ草原を後にしました。



ハバヤマボクチが自己主張

○車座講座「藤原茶のみ昔語り」

今回は車座講座「藤原茶飲み昔語り」でした。語り手は民宿の女主人・林ふみ子さんです。傘寿を過ぎてなお豊饒とした語り手は、昭和初期の比較的穏やかな時代から戦中・戦後の食糧難・物資不足の時代、ダム開発などで藤原が大きき変わった高度経済成長時代、その後の過疎化に拍車がかかった時代など藤原の変貌ぶりを見てこられました。

講座は、昔日の青木沢集落のこと、青木沢峠道のこと、藤原の伝説、藤原の四季と暮らしのこと、趣味である押し花のこと、当時の営林署の評判、青水に対する評価などを草野が質問してその回答という形で語っていただきました。以下、印象に残ったものを記載しておきます。

ふみ子さんは、藤原の青木沢集落で生まれ育っておられます。子供時代通学路として使った青木沢峠道(青水が再生)を一緒に歩いていただいたことがあり、その時の感想と大雪の中の峠道の通学は大変だったでしょう



との問いかけに「40年ぶりに歩いて懐かく、歩けるようにしていただいてよかった。雪の中の生活、皆さんそうおっしゃるけど、こんなもんだと思って暮らしてきたのでそれほど苦になりませんでしたよ」と予想に反した答えが返ってきました。そうですね、自然を受け入れた生活でないとは厳しい中では生きられないですね。私たちの今の生活は自然に打たれ弱く不満や不平が多すぎますね。反省させられました。また、雪道の通学には雪踏みなど、両親や集落の大人たちの子供達への愛情あふれる支えがあったことを語る顔には、周りの人々への尊敬の念があふれていました。

両親や兄弟の絆が強く、家族文集も出されておられますみなさん教養に富んだ方々です。家族が助け合って暮らしてきたエピソード、藤原は子供の教育に熱心でみんなで助け合って学校や子供たちを守ってきたことなど、村人や隣近所の人々に対する愛情がひしひしと伝わる語り口でした。ここでは昔の貴重な写真などを見せてもらいました。

亡くなったご主人は材木の伐採搬出の杣頭もさかれていて索道での材木の出し方を手ぶり身ぶりで説明されました。索道での伐採搬出は大変危険な作業ですが、ご主人が杣頭時代には一件の事故もなかったとか、仕事に厳しいきちとした人だったようです。このとき、ご主人が買い集められた材が民宿の普請材料に使われていて藤原で良い材が出ていたのがうかがわれます。

押し花は、相当、勉強や研究をされたようで、NHKの婦人百科のコンテストにも入選されたとのこと。たくさん作品を見せてもらいましたが草花の特徴を捉えて作品のどの部分に使うか発想力の素晴らしさがわかる作品でした。

自然とともに暮らす知恵、人に対する愛情があふれる語りは約1時間半続き、参加者からの質問にこやかに答える御顔には赤味が差し、その魅力にひきこまれた参加者は夜遅くまでその余韻に浸っていました。林さんはとても魅力的な歳の取り方をされています。私はあのような歳の取り方ができるだろうか？あこがれます。

○早起きは値千金

2日目は、皆さん5時の早起きで、昨夜の語りに出てきた青木沢集落を実際に見て、語りがよくよみがえってきました。そのあと、上流に鎮座する武尊神社



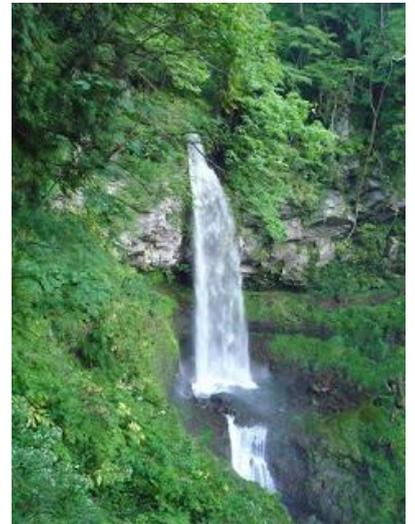
に参拝し、名瀑裏見の滝を散策しました。遊歩道には栃の実がたくさん落ちていて、栃餅に挑戦する

という某参加者が動物に先駆けて拾っていました（リスさんお先に）。

今回も県道刈り払い奉仕もしました。

稲が色づき始めた初秋の藤原の素晴らしい景色と人情に満喫した2日間でした。

尚、今回の活動の様子を群馬県森林ボランティア支援センターのスタッフが取材されました。



他人味噌を味わう旅 日光オプショナルツアーを実施 草野 洋

○上ノ原を後にして

9月13日、上ノ原での活動を早めに切り上げて2台のレンタカーに分乗した一行は藤原を出発。途中水上駅で1名をピックアップ、上毛高原駅で今回のオプショナルツアー（以下OT）に参加しない2名と別れ、10名となって金精峠経由で日光湯元へ向かいました（坤六峠経由がブナ林など見どころ満載でベストですが送迎の関係で断念）。

OTは今回で3回目、定例活動の後を利用して、これまで中之条、片品村を訪れています。

今回のOTは、青水の活動にもたびたび参加していただいている飯村さんが主宰する日光茅ボッチの会のフィールドを訪れます。日光茅ボッチの会は、日光市土呂部地区で青水と同様な二次草原（採草地）の保全活動をしている団体です。

120号線を走り、丸沼を通過し、途中、湯ノ湖と男体山の絶景が望める金精峠ビューポイントで一休み、湯滝遊歩道を散策して本日の宿「休暇村」のある日光湯元に到着したのが16時30分ごろでした。

○休暇村日光湯元

このホテルは、風光明媚な湯ノ湖湖畔に在る温泉ホテルです。硫黄の香りが強い白濁湯で温泉浴を楽しみ、地元産を使った

食材の会席とサラダバイキングの夕食を堪能した後、例によって懇談会、皆さん言いたいことを言っ

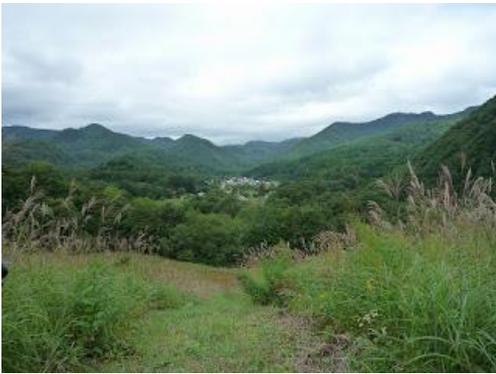


ては笑い合う和やかな雰囲気。特に、Sさんはいつもに増してのはしゃぎぶり、よっぽど楽しかったのでしょう。

翌日は、早起きして湖の周りを散策した人も多かったようで、出発は8時、土呂部まではいろは坂を下り、日光市、霧降高原を経由して約1時間40分、途中雨が降り出しましたが土呂部集落到着した頃は上がっていました。

○日光茅ボッチの会のフィールド

現地では、日光茅ボッチの会の代表の飯村さん、副代表でネイチャーガイド会社「自然計画」の宮地さん、地域おこし「くりやまGo企画」代表の青山さん、そば処「ひなた」の湯沢きみえさんにご案内いただきました。フィールドは大曾根、オホoppaの2地区A～Fまでの6区画、合計5.84haです。うち保全対象地域4.93haにはシカ食害防止用の



電柵が張られ周囲は漏電防止のためきれいに刈り取られていました。土呂部の草地は、上ノ原と違って牛の飼料を採取する場所です。つまり採草地で、かつては集落の肥育牛の資料として利用されていましたが現在は1軒の畜産農家が利用しているとのことでした。上ノ原とは植生もだいぶ違って、ススキが少なく、ワラビなど多様な植物が生育しています。それだけに、草花も種類が多く多様性が豊かな草地でした。

私の印象に残った草花はウメバチソウ、コウリンカ、シオガマギク、サラシナショウマ、ワレモコウ、キバナアオギリ、アクボノソウなどですがこのほかに、カラ



ハナソウの花(写真・左)がちょうど盛りで口に含みむみビールの苦みを味わいました。

林に入るとサンショウが実をつけておりこれらも味わいながらの散策です。柵の周囲はきれいに刈り取られており歩



きやすく、飯村さん他スタッフの豊富な植物の知識に裏打ちされた解説を聞きながらの散策は楽しく時間の経つのも忘れてしまうくらいでした。最後に訪れたオホoppaにはシバグリの木がたわわに実をつけて、地面にたくさんの実が落ちておち、みんなで栗拾いとなってしまいました。ここにはオオナンバンギセル(写真・上)が咲いていました。

日光茅ボッチの会の定例活動は月2回、18名の会員のほかに宇都宮大学の学生サークルや土呂部集落の協力があってなかなかにぎやかなようです。参加者集めに苦労している青水にはうらやましい境遇でした。作業は、草刈り、シラカバなどの侵入種伐採、電気柵設置、メンテ、自然観察会、植物調査など、中でもシカ対策は悩みのタネのようです。平成25年からの活動の甲斐あって、二次草原が維持され茅場風景と貴重な植物が守られています。



刈り取りは、採草利用なので刈り払い機を使っており、一定方向に倒すためのオリジナルの付属品を付けた機械(右上写真)を使わせてもらい大変参考になりました。また、刈ったボッチに目玉などを付けて擬人化したものは遊び心があって青水でも10月の茅刈でやってみることにしました。



草原を歩いた後は元気のいっぱいの女将さんが取り仕切る民宿「水芭蕉苑」でおいしい蕎麦・イワナ定食をごちそうになりました。たぶん10割蕎麦で

しょう。ぶつ切り状の素朴な蕎麦に我が故郷で大みそかに食べる「そばきり」を思い出しました。

○霧降高原

この後、一行は飯村さんの勧めもあって、霧降高原スゲの平の半自然草原の遊歩道を1時間ほど歩き、秋の草花を鑑賞しました。霧降高原はそのロマンチックなネーミングもあって一度は訪れたい名所でしたので私にとっては念願がかないました。90種以上の草花が生育し、鑑賞のための施設も充実した素晴らしい草原でした。



ニッコウキスゲの花のころに再度訪れたいものです。霧降高原からは今市市が一望され、今度の豪雨で牙をむいた鬼怒川が曲がりくねって流れ下っていました。しかし、土呂部も総雨量540mmだったとのことですが山肌の崩壊地は想像以上に少なく、森林がちゃんと持ちこたえたことを物語っていました。何よりもあの記録的な豪雨ですから、それらが鬼怒川に集中しての堤防決壊、自然の猛威は恐るべし、この被害で日光からの鉄道の便は不通、レンタカーは宇都宮乗り捨てとなってしまいました。

被害を受けられた皆様に心よりお見舞い申し上げます。

被るを受けられた皆様に心よりお見舞い申し上げます。

被るを受けられた皆様に心よりお見舞い申し上げます。

被るを受けられた皆様に心よりお見舞い申し上げます。

○他人味噌を味わって

上ノ原だけを見てきた我々にとって今回の日光茅ポッチの会のフィールド視察はこれからの茅場の保全活動に参考になることが多く本当に有意義でした。

やはり、たまには他人味噌を味わってみるべきですね。他流試合で手前の味を見直すことの大事さを知らされました。今回のOTも大成功??

ところでこのOT紀行文も手前味噌にならないように、企画・催行した本人が書くより参加者に書いてもらいたく、参加者の中で一番熱心に質問し写真を撮り、メモをしていた方をお願いしてみました。体よく断られてしまいました。よって、思い切り手前味噌です。

■一般参加歓迎プログラム2015⑤ 「錦秋の草原で茅刈り・茅ポッチづくり」 開催報告 & 参加者レポート

木枯らし1号の中に立つ目玉茅ポッチ君登場
草野 洋

2015年度の茅刈りは、10月24、25日、日光茅ポッチの会の飯村さんをはじめ首都圏参加者26名、町田工業から3名、地元古老3名、町役場担当者の総勢31名が参加しました。

初日は、日が射す温かい気温となり、昨年が目を見張るほどの紅葉だったのが今年は季節が1週間ほど早いようで、やや劣るものの色鮮やかな歓迎ぶりでした。もう一つ歓迎してくれたのは尾花の綿毛が飛び始めたススキ、今年はススキの生育状態は例年に比べて良いように感じたので、町田社長や村の古老にも聞いたところ同様な感想でした。ただ、雑草の繁茂も激しく、オヤマボクチ増えているのが目立ちます。さらに歓迎してくれたのは北山塾頭などが企画した「お散歩マルシェ」。



いわゆるスタンプラリーで、登録料500円で藤原の名所を回り、スタンプを4個集めると明川の新米1Kgがもらえます。素晴らしい景色や文化財を堪能し地域の人に触れ、おいしいお土産付のGood ideaです。参加者のほぼ全員が登録しました。

<https://www.facebook.com/soudamusa?ref=stream>

スタンプは、上ノ原にも2個、お地蔵さんや、湧水箇所、民宿にもおいてあり、民宿などでは手作りのうどんや、おはぎ、コーヒ、ケーキが楽しめます(有料)。前日入りした私たちは民宿名倉でキノコうどんとおはぎをいただきました。



亭主やおかみさんとのよもやま話も楽しく、藤原の観光関係者総がかりの「おもてなし」を感じました。

始まりの式で、古老の一人から「明日はヤマセが吹き雨になるので今日が勝負」との観天望気が出て一同びっくり(气象台の天気予報では夜のうちに雨が降り明日も晴れ)、気合を入れての茅刈りとなりました。

今年は、作った茅ポッチに目玉や帽子をかぶせるなどして、ポッチを擬人化する遊びを取り入れました。ポッチを広場まで運び、目玉やハロウィン衣装などを着けた茅ポッチのユーモラスな恰好が好

評。お散歩マルシェで上ノ原を訪れる人々を歓迎するアートとしても役に立ったようです。

今宵の宿は「とんち」。例によって豪華な夕食をいただいた後は「第5回車座講座：最後の茅刈職人さんに聞く藤原の茅葺と生活」です。語り部は、塾の発足当時からお世話になっている藤原最後の茅葺職人阿部惣一郎さん。



惣一郎さんは様々な山仕事を経験され、生活用具の手作り、藤原の郷土料理の再現など豊富な知識と技術を持った方です。

例によって草野が質問し、参加者からも随時質問を受ける形で進めました。その内容は、藤原最後の屋根茅葺はいつで、村人はどんなふうに係わったのか。屋根茅葺の段取りは。費用の工面は、惣一郎さんお師匠は。いい茅の条件は。など、そのほか、青水に対する思いなどを語っていただきました。

藤原の屋根茅葺は、集落ごとに茅場があり、葺き替えをしなければならぬ順番の家を決め、労力や食糧などを出しあい集落総出でやったようです。相互扶助のいわゆる「結」で、自分が受けた食糧や労力などは帳面に付けていたそうです。ここでも藤原の住民力が発揮されようです。

この席には、岸みなかみ町長に出席していただき、挨拶後、惣一郎さんの語りを一緒に聞いていただきました。お忙しい中ありがとうございました。

この夜、かなり激しい雨が降り、気温も下がり風も強くなってきました。木枯らし1号が吹いたのです。朝4時に外を除くと星空。どうやら天気は良い方にズレたようです。風のおかげで地面も乾いて茅刈りができると判断して早起きが出来た7人は、奥利根水源の森林へドライブ。

ブナはブラウンの葉をつけ、道路は木枯らし1号が落としたおびただしい落ち葉、気温はおそらく3

度程度、雪が舞い、山頂は初冠雪。

2日目の作業も茅刈り。初冠雪の武尊山をバックに約25人が従事しました。

私も、茅



刈り検定希望者がいなかったことから広場の奥の茅丈が高いところに入り黙々と茅刈りです。

刈り出さないと富栄養化になってしまいススキは良く育たないんだよなーと思いながら刈っていると、Oさんが連れてきたKちゃん(6歳)とSちゃん(3歳)姉弟の声が聞こえてきました。この光景と声はどこかで見て聞いたがする・・・と忘れていた記憶がよ

みがえりました。私が小学校に入る前、保育園や幼稚園などなかったわが故郷の田舎では、子供は大人と一緒に野良仕事に連



れていかれ畑や山で遊んですごしました。私は祖母に連れられて茅場に行ったことがあり、時々祖母とはぐれ泣きながら呼んだものです。

祖母が駆け寄ってきたときに見せた何とも言えない笑顔を思い出しました。今、森の幼稚園や保育園が流行っていますが昔はそれが当たり前だったので

す。k・sちゃん姉弟も茅場で駆け回ったこととお祖母さんのやさしい笑顔の記憶が残って大人になってから懐かしく思い出すでしょう。

来年は麗澤中1年生がここで茅刈りを体験することを検討しています。茅場は子供たちの情操を養う場としても役に立ちます。

拙句 泣いて呼ぶ 孫を看とめて 茅を刈る

茅深し 子らを探して 鎌休む

今回の活動のテーマは、「ススキを刈って世に出そう」です。屋根茅は不足しています。ススキは草原で風景として私たちを楽しませてくれますが世に出せば第2の人生(茅生)として役に立ちます。できる限り多く品質の良いものを出したいものです。

そこで、「茅スグリ」をして付加価値を高めてみようという道具を手作りして試してみました。

そこで、「茅スグリ」をして付加価値を高めてみようという道具を手作りして試してみました。

<http://commonf.blogspot.jp/2015/10/blog-post.html>



惣一郎さんに鎌の柄を使った茅葺職人のスグリの方法を教えてもらいながら試行しましたところこの道具使えそうです。11月、3月の活動で本格的に茅スグりをやることにします。



今回の活動で作った茅ポッチは2日間で8ポッチ(440束)です。これらと古老たちがこの日以降刈るポッチを11月14、15日に運び出します。

茅刈り、茅ポッチづくり体験と ユネスコエコパーク 朱宮 文晴

私が所属する日本自然保護協会(NACS-J)はみなかみユネスコエコパークの登録支援をしています。ユネスコエコパークは、ユネスコの人間と生物圏(MAB)活動の一つですが、生物多様性保全、人と自然が共生した持続可能な地域づくり、調査研究教育支援を目的としている国際的な取組です。ユネスコエコパークは、厳重に保護する核心地域、核心地域を保護し、調査研修活動などが行われる緩衝地域、人と自然が共生する持続可能な地域づくりが行われる移行地域の3地域に区分して上記の目的を達成します。

みなかみ町を推薦する理由は、核心地域と緩衝地域では、原生的な自然環境が残されていることに加えて10年以上継続している官民協働の生物多様性保全活動である赤谷プロジェクト、谷川岳周辺において環境省や観光協会、ガイドなどが協力して保全活動や普及啓発活動を行う谷川岳エコツーリズム、そして、ユネスコが近年特にその活動を強調している移行地域では、藤原地区の上ノ原における「森林塾青水」の10年以上にわたる茅場と薪炭林であった入会地を活用した生物多様性の保全と地域づくりです。特に、草地を管理するための「火入れ」や「茅刈り」を復活し、収穫された茅は地元だけでなく利根川流域の文化財などの茅葺き屋根の保存に利用されているなどボランティア活動にとどまらない地域の生業の復活は簡単にできることでは



ありません。また、利根川下流域からの参加者を募るなど、草の根の流域間交流は未来志向の発展的な運動として期待されます。

10月24日~25日かけてみなかみ町藤原地区上ノ原で行われている茅刈り、茅ぼっちづくりに参加しました。参加は30人くらいでしたが、東京周辺から参加している人が多かったようです。私としては藤原に住む古老の方に指導をしてもらえるのがとても魅力でした。ぼっちづくりは自分のペースで進めることができ、久しぶりに一人になり頭を真っ白にして3時間くらい気持ちのいい汗をかきました。休みの間に昔の作業の様子やくらしの様子などをお聞きできるのもうれしい体験でした。全員で50ポッチくらいを作ることができ、達成感もありました。上ノ原の茅刈りを残していきたいと思いました。



夜は古老から昔のお話を聞かせていただきました。岸町長も表敬訪問

ふたたび、上ノ原へ 小沢 律子

「面白い記事があったけど、時間があるなら行ってみれば？」

母が小さな新聞の切り抜きを見つけたのは昨年のこと。それが森林塾青水の茅刈バスツアー参加者募集の記事でした。

当時仕事を辞めたばかりで思いきり身体を動かしたかったのと、山の中でひたすら茅を刈っていたら気分がスッキリするかもという思いで申し込んでみました。

自分が使う鎌の刃を砥いで、一面のススキ野原で背丈を超えるまでに伸びたススキ刈りと、それを束ね最終的にポッチにまとめるまでの手順を教わり不格好ながらも何とか形にする。力仕事は嫌いではないもののスニーカーで足を取られたり鎌の切れ味がよくなかったりと悪戦苦闘しながらも二日目にはなんとか茅刈検定で「茅刈士心得」認定を受けられました。そしてその時リーダーだった職人さんから一言褒められたことがとても嬉しくて「また来られるといいな」と。

上ノ原の一面のススキ野原と美しい紅葉、真っ暗な夜空と煌めく星。朝の澄んだ空気と抜けるような青空。

それら全てにもう一度会いたくて。再び上の原を訪れました。

今年は残念ながらバスツアーはなく、自分で在来線の時間を調べてのんびり3時間ほどかけて水上へ。駅で青水の方の車に同乗させていただき、途中ちょうど開催されている「お散歩マルシェ」のスタンプを集めながら上野原へ向かい、午後から一年前に教わったことを思い出しつつスキを刈り始めました。でも夕方までに作ったボッチは僅かに2個。しかも一つはまとめ方が不格好で残念な感じ。更に夜の車座講座ではどうしても起きていられず申し訳なく思いながら途中退座してしまいました。

夜中には強い風と屋根を叩く雨の音に目が覚め翌朝の散歩が心配でしたが、明け方には雨も止んで予定通り朝の散歩へ（車で）出発。

早朝の水源の森は昨夜の風に木の葉が落ちて、すっかり冬の森の様相で、息を吸うと体の中が洗われるような清々しさです。今季一番の冷え込みとなった朝の散歩でしたが、やはり来てよかったですと思いました。

二日目はこちらの都合で作業には参加できませんでしたが、帰りのバスの心配までしていただき皆さんに本当にお世話になりました。また来年も参加できたらと考えておりますので、その時はよろしくお願いたします。もう少したくさん刈れるようになりたいと思っています。ありがとうございました。



■一般参加歓迎プログラム2015⑥
「茅ボッチ運びだしと山の口終い」
開催報告 & 参加者レポート

茅ボッチを世に出す
お手伝いと十二様への感謝 草野 洋

気になっていた天気予報は両日とも降雨とのこと。この2、3年初雪に見舞われ雪の中で茅ボッチをかつぎ出す姿はまるで収容所の捕虜の過酷な作業と言えるような「茅出し」となっていました。

今年は、日程を1週間早め11月14、15日に

したので雪こそないものの、やはりお天気には恵まれないようです。自然には逆らえない、無理はしないがどんな天候でもできる範囲でやるのが山仕事です。今回は首都圏からの参加者14名、地元の茅刈衆4名、町田工業3名、それに地域振興をテーマにしているゼミ学生のお手伝いをいただきました。



10月24、25日に塾の定例活動で参加者が刈った茅ボッチ、地元藤原の茅刈衆4人刈った茅ボッチが上ノ原に林立する風景はもうしばらくそのままにして楽しみたいところですが、この茅ボッチには次の大事な使命が待っています。

それにはトラックに積み込める作業道脇まで担ぎ（引き）出し、町田工業さんに買い取ってもらって、加工して重要建物文化財などの屋根茅に利用されることです。「茅出し」は茅ボッチが世に出て新たな価値を生むため重要な作業なのです。

雨具を着けて、びしょ濡れの作業を覚悟しましたが、幸いにも小雨模様の中での作業となり、あらかじめ地元の方にまとめていただいていたボランティアが刈ったボッチの引き出しから始めました。

作業は、ボッチを倒し、腰に当たるところ付近を一広ぐらいのビニールひもで縛り、2ボッチの穂先をかついで挽きずり出します。下りのところはいいのですが上りは重みが2倍ぐらいに増します。おまけに前日から雨で水分を含み、木枯らしに倒れていた乾燥が不十分なボッチは





の間にか増えてしまったようです。

今年は、4人の村人に茅刈りをしてもらいましたので、800ボッチ(4000束)を超える数があり、茅の生育状態もよく例年に比べて、背が高く質の良い茅ボッチです



かなりの重量です。

ボランティアが刈った茅ボッチは役場の大芦倉庫にストックするため、町田工業のダンプトラックで運びました。茅刈りの時の集計では88ボッチだったのが、積み込んでみると98ボッチ(490束)、どうやら、目玉をつけて擬人化したため、いつ

2日で終わるか心配もしましたが、参加者に地元NPOの北山さんたちの炭焼きの様子の見学をさせよう

と15時半に本日の作業は終了としました。

今回の宿は、温泉が引湯されているロッジ「たかね」。重量労働に疲れた体を癒し、夕食後は、ご主人を語り部にした車座講座となりました。

○車座講座「藤原の山河・自然に魅せられて」。

ここのご主人、中島仁三郎さんは、奥利根の山河、自然をこよなく愛しておられ、自らも「俺の病は奥利根病」とおっしゃっています。現在68歳ですがこれまで幾度となく、利根川源流遡行(※)を举行され、昨年9月の活動の際は、67歳の誕生日に3日間かけて利根川の最初の一滴滴るところまでいかれたお話を聞きました。また、奥利根山岳会に所属され「利根の山なら任せてよ」とおっしゃる山男でもあります。さらに、営林署の現場職員として40年以上勤務して山づくりに従事された方でどんな山仕事でもこなされるまさに奥利根の山のプロといえます。奥利根の山や川、動物、これまでの様々な経験や藤原の暮らしについて語っていただき、特に、「利根

川源流遡行」(※)を語る際には、山のプロとしての山への愛情やたくましさがあふれていました。

注※)利根川の源流は群馬県の最北端の大水上山(1,831m)であり、この山の南面にある三角形の雪渓(通称「三角雪渓」)が源頭である。ここに至るには、利根川の最上流にある八木沢ダムから、沢を遡上すること3日を要し、また困難なIV級以上の滝が連続し、沢登りとしては難易度としては最高度のグレードとなる。

2日目は、雨も上がり、遅れを取りもどせると喜んだものの窯出しが見られるとの情報が入ったため取り掛かりが遅れたことや、思った以上に遠距離の引き出しとなって11時になっても相当のボッチが残っていましたが、皆さん精力的にやっていただき無事12時には全部のボッチを運び出すことが出来ました。

町田工業のトラックに積まれて中之条に行く茅ボッチを見て大事な娘を嫁に出す気持ちになってしまいました。

今年の、茅刈り実績は、

地元4人衆の分	5060束(1012ボッチ)
ボランティア分	490束(98ボッチ)
合計	5550束(1110ボッチ)

となりました。

この後は山の神様(十二様)に作業の終わりを報告し、収穫と無事に終了したことに感謝する、「山之口終い」神事を茅刈り衆の一人である雲越萬枝さんの采配で行い、お神酒で献杯しました。

この日は野焼きから茅出しまで年間の活動の中で一番、喜びを感じる時です。山の神様のおかげで自然の恵みである茅が収穫できしかも無事に終了することが出来ました。ホッとするとともに大自然への感謝とご協力いただいた皆様に心から御礼申し上げます。

参加者の皆様、黙々と重労働に耐えていただきありがとうございました。

このあと、看板はずし、炭窯で出来上がった白炭を少し分けていただき解散となりました。



茅ボッチの運び出し作業

— 古老の言葉に学ぶ —

沖 浩

茅ボッチの運び出し作業に参加しました。腰や肩などあちこちの筋肉が痛む、かなりのハードワークでしたが、多くのことを学ぶ貴重な体験になりました。

超・不器用な私は、ノコギリや鎌などを使う技能を必要とする作業は大の苦手です。「茅の運び出し」と聞いて、「運ぶだけなら私にもできるだろう」。そう高をくくって参加したのが、そもそもの間違いでした。



茅ボッチは2メートル前後の巨体。倒して胴体にひもを巻こうとしてもなかなか届かず、しかもその巨体を2体引っ張って広い茅場を

運ぶのはかなりの力仕事でした。初めは見よう見まねでやっていたのですが、仕事ははかどりません。

そんな様子を見ていたのでしょう。藤原最後の茅ぶき職人といわれる阿部惣一郎さんから注意を受けました。「すねを使って押さえつけ、しっかりひもを結びなさい」。名人の実演による指導の効果は絶大でした。ひもの長さにも気をつけた結果、作業スピードは格段にアップ。超・不器用な私にも自信がわいてきました。

活動の奥深さを感じました。自然環境を再生する活動だけでも大変なことです。それに加えて地元の人たちとの人間関係づくりや、炭焼き体験、「山之口終い」神事などの文化的側面を重視している点が印象に残りました。自然環境を再生するには、それを支えてきた背景の力の再生も必要なのだと理解しました。茅ボッチの運び出しを通して、地域の古老たちの言動に直接触れることができたことは、私にとって貴重な体験でした。

多くの人たち、とりわけ若い人たちに古老たちの言葉を聞いてもらいたいと思いました。



最後になりましたが、青水の皆様、大変有り難うございました。今後ともよろしくお祈りします。

(公益財団法人森林文化協会常務理事兼事務局長)

第三回東京楽習会「上ノ原の昆虫相」

講師 山崎裕志先生

開催報告

稲 貴夫

第三回東京楽習会を12月12日(土)午前10時半より、港区の地球環境パートナーシップセミナー室で開催し、会員・会友20名が参加しました。講師をお願いしました山崎裕志さんは、(株)プレック研究所の動物調査部に勤務し、全国各地で昆虫類の調査活動に従事するとともに、「桜丘すみれば自然庭園」等で、来園者に生きものの魅力を伝えるボランティア活動も行っておられます。そして三年前より、青水のフィールド「上ノ原」に生息する昆虫の調査に取り組んでおりますが、楽習会では「上ノ原の昆虫相」と題し、昆虫からみた青水のフィールドの特徴について、実際の昆虫などの画像をもとにお話いただきました。そのお話のほんの一部を紹介します。

○群馬県の昆虫相解明の現状については、チョウの種類が多く、カミキリムシは日本屈指の棲息地となっている。

○上ノ原では三年前の最初の調査で、いきなり希少なハムシやカメムシを発見した。



※特に、鳥取県での1968年を最後に報告例のなかったカメムシ目ナガカメムシ科の「ヒウラヒサゴナガカメムシ」を採集。『月刊むし』No.563号(2015年10月号)で報告した。

○上ノ原ではこれまでに782種の昆虫を確認しているが、まだ一部であり、これから増えてゆく。

○樹林環境では、樹林の花や葉に集まる虫、立ち枯れや枯れ木に集まる虫、キノコなど菌類に集まる虫、獣糞に集まる虫などがある。

○草地環境では、草地の花や葉に集まる虫、広葉草本に集まる虫、草地に点在する樹に集まる虫などがある。

そして、上ノ原の昆虫類の特徴として、

○樹林では、健全な形で保全されているため、枯れ木や倒木が少なく、朽木性、食菌性の昆虫類が少ない。

○また、カエデ以外の花木が少ないため、訪花性昆虫類が見つけづらい。

○試験伐採などにより森林環境の多様性が保たれることで、潜在的に多様な森林性昆虫類の生息が期待される。



○草地では、茅場であるが多様な草本が生育している。

○全国的にも希少な、タグチホソヒラタハムシ、クロスジカメノ

コハムシ、オオカツオゾウムシ、アオバホソハムシ、ヒメシジミ、ウラギンスジヒョウモンが安定的に生息している。

○草原エリアに樹林性の昆虫が見られ、入り口から延びる中央通路沿いの昆虫相も多様である。

そして、多様な昆虫相を維持するために、

○草地は放置すると環境変化が速いので、火入れや茅刈りによる環境の維持が大切である。

○林縁部と中央通路沿いの昆虫が多様であり、その環境の維持が大切である。

○定期的な樹林の伐採更新や、新たな水辺、湿地の創出が昆虫類の多様性維持につながる。

講演後の質疑応答では、上ノ原では二三年前にテントウムシが増えた時期に、ススキの衰退が感じられたことについての質問には、「生物農薬」としてのテントウムシの働きに触れ、むしろテントウムシは人間にとって益虫であり、その前段階としてススキ等のイネ科植物を食べるアブラムシが増えたことで、アブラムシを食べるテントウムシが増えた可能性を指摘されました。

山崎先生は学生時代に植物を勉強したことが、社会人になっての昆虫の調査研究に非常に役立っているとのこと。ミズナラ林とススキ草原を中心とする多様な植物環境と昆虫相との関係について、非常に啓発を受けた楽習会となりました。山崎先生の上ノ原での調査はこれからも続きますが、青水の活動とのより深い連携が期待されます。

■ 藤原現地報告

「藤原伝統の炭焼きを復活！」

北山 郁人

昨年、上ノ原に作った炭焼き窯で炭焼きを始めました。初めての火入れで、石が割れないか、うまく



焼けるか心配しましたが、さすが惣一郎さんが作った窯だけに、びくともせず、いい炭が焼

けました。

焼いているのは、ミズナラの白炭です。真っ赤に焼けたところで外にかき出して、空気にさらし焼きしめます。そして、土をかけて一気に鎮火させます。初めの3日間は、窯が熱くないのであまりいい炭が

焼けませんが、4日目あたりから中の石が真っ赤に焼けて、次の材料を入れるとすぐに燃え出します。毎日、3俵半～4俵の炭ができました。実際に魚



や「ぼた」を焼いてみましたが、市販の炭と違って、変な臭いや煙もまったくなく、火力もあり、美しく燃えました。

炭焼きの師匠の惣一郎さんは、道具もノコギリとナタだけで作ってしまいます。これは、「カキ」という「じょれん」のように使う道具です(次頁写真)。

石や土をよせたりするときには重宝します。特に素晴らしいのが、板に三角形の切り込みをいれ、柄を差し込み、クサビを入れるとガッチリと固定され、びくともしません。釘や木ネジなど一切使わないで、そこら辺にある木であると言う間にできてしまいます。先人の知恵は、すばらしい！





惣一郎さん手作りの道具「カキ」



■麗澤中学校「樹木観察会・FW発表会」 参加報告 高野 史郎

9月12日の土曜日、麗澤中学校の麗鳳祭へ出かけ、5月の樹木観察会・7月のフィールドワークがどのような形で発表されるのか、興味しんしん、出かけてきました。

思えば、麗澤中とのお付き合いも長いもので、始まりは確か2004年です。今年も昨年同様に午前10時からと午後の2回、各班4人程度ずつが前に出での発表です。4クラスの合計で30のテーマ。

各班の発表を大体全部、覗き見させていただきま

した。後半の質問や入れ替え準備のための3分程度の時間も含めて、持ち時間は各10分。それが発表時間3分半という班もあったのが意外でした。もっと長い原案があって、絞り込むのに苦労しただろうと思っていたからです。

ダムのテーマが、そのうちの3分の1を占めていたのも驚きでした。ダムは配布資料もあって、発表しやすかったからでしょうか。その反面で、樹木観察会から上ノ原のフィールドワークにつなげての、“ゆめプロジェクト…仁草木に及ぶ”の精神を、中学生らしい若々しきで、キラキラと表現してくれたものがなかったのが、とても残念でした。

中学1年生という年齢は、まだ人前に出での発表に慣れていないせいもあるのでしょうか。下を向いてメモを見ながら小さい声で言うのが殆ど判読不可能。教室の後ろから見て「もっと大きな字で書かないと読めないよ！」などという事前練習も、してほしかったと思いました。(もっともこれは、大学生の卒論発表などでもいえることで、パソコンで30センチの距離から見る習慣が身につけているから、見る人への配慮にまでは気が行き届かないのですね。)

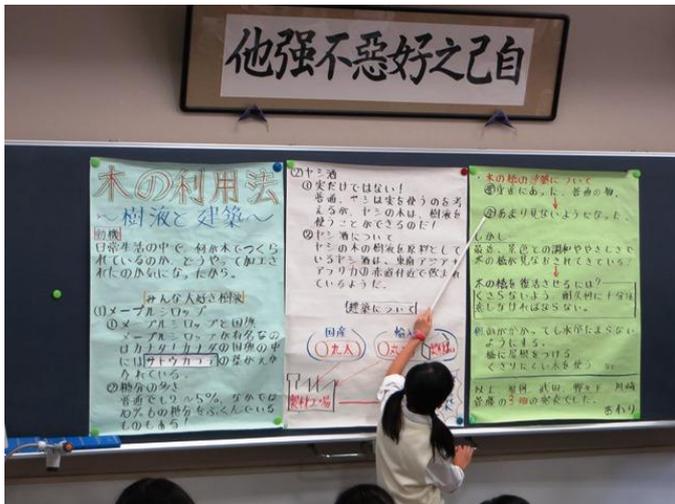


午後からは、2時半ちょっと前に1年生の教室から抜け出して、階段教室での2年生の発表「日本文化研究」を拝聴しました。生徒の投票から選びだされた8人が、イラスト入りの原稿をOHPで発表です。テーマは「日本の主な年中行事」など。1年生とは段違いに、堂々としているんです。

評価方法は、姿勢・視線・声の使い方、ジェスチャーなどの項目。「5の大変よい」から「1の努力不足」までの5段階評価です。1年生がチームワークを必要とするのに対して、2年生は個人プレーですから、考えをまとめやすかったこともあったのでしょうか。

教頭先生の総評で「時代は、インターナショナルからグローバルへと進んでいる。ガガーリンは、地球は青かったと宇宙船から地球を眺めた感想を述べた。皆さんは3年後にはイギリスへ、ホームステイに出かける。自分なりの課題を見つけて夢多く育てほしい」と激励されました。

遠慮がちな1年生と、自信に満ちた2年生との対比を、この若い世代の1年間の目覚ましい成長ぶりなのかと捉えながら、はて、来年のフィールドワークでは、と考えたのでした。



1年生が書き出した30のテーマのそれぞれを、森林塾青水のメンバーだったら、5分間の説明をどうまとめるのでしょうか？書き出して自分でもやってみると、若い世代と中高年との、よりスムーズな結びつきを考えるきっかけになるのかもしれないと思ったのです。

◆協賛団体紹介 第1回◆
株式会社 町田工業

今号より、森林塾青水の協賛団体として、様々な形で活動に協力いただいている会社などの団体をご紹介します。第一回は「株式会社町田工業」をご紹介します。



今年の茅刈りで挨拶する町田社長

株式会社町田工業は、神社仏閣などの新築・改修をはじめ、古民家などを含む文化財建造物の修理保存を専門とする建築会社です。現社長の町田茂さん（71歳）が、群馬県吾妻郡中之条町で昭和58年に創業されました。会社のホームページには、伝統建築

についての町田工業の理念が次の通り謳われています。

伝統的建築物、とりわけ指定重要文化財の多くは、地域の風土と時代的・社会的環境に適応し、時代の美意識や信仰心を反映しながら、持てる技法と資源を活かして作りだされたものであり、先人達の知恵と技術、時代精神の結晶といえます。

その意味で文化財は生きた歴史であり、それを技術や意匠とともに、可能な限りつくられたありのままの姿で後世へと引き継いでいく事は、いつの時代においても変わらず、意義深い事に違いありません。

また、時代・地域・文化・自然といった環境の集約的な表現として文化財をみることは、歴史の追体験そのものであり、現代という時代を見つめ直し、同時に未来を見通す道標ともなり得るでしょう。〈文化財等伝統建築施工方針〉より（抜粋）



富沢家住宅・18世紀末建造の大型養蚕農家

これまで手掛けてこられた仕事のなかには、旧戸部家住宅や雲越家住宅（いずれも、みなかみ町）、富沢家住宅（中之条町）、小野家住宅（所沢市）など、国の重要文化財指定の茅葺建造物が数多くあります。

町田工業では、これらの屋根材として、創業時より上ノ原の茅を利用してきました。こうしたご縁で、青水が野焼き、茅刈りを始めたときから、欠かせないパートナーとして、指導・協働をいただいております。現在、野焼き、茅刈り、茅の運び出しといった一連の茅場再生・保全活動にあたって、社長はじめ幹部職員の皆さまには毎回、地元古老衆とともに作業の指導を頂き大きな支えとなっています。また、地元衆が刈り取った茅については適正な値段で買い取っていただくようお願いし、現在も継続してもらっています。ボランティアが刈った茅もふくめ、町田工業に全量引き取ってもらってはじめて、上ノ原の茅が重要文化財の屋根材として“世に出る”こととなります。このように町田工業は、当塾にとってかけがえのないパートナーなのです。

株式会社 町田工業
 住所 群馬県吾妻郡中之条町五反田
 3529-4
 電話 0279-75-0441 FAX 0279-75-1828
 URI (URL) www.machidakogyo.co.jp

■野守のつづやき(6)

—秋から冬、「野守」仲間を訪ねて—

●「野守」仲間に心寄せる旅 塾長職をバトンタッチして2年目の今秋、全国各地の「野守」仲間を訪ねることにした。利根川流域だけでも十指、北海道から屋久島まで指折り数えたら30を超えてしまった。そこで先ず、草原系の仲間から始めることにした。

(1)9月13日。最初に訪ねたのは**日光茅ポッチの会**(飯村孝文代表)。日光市土呂部地区の草地(4か所、計5㍏)を当塾仲間と視察。元は肉用牛の飼育のために利用されてきたので、

草丈は低く抑えられ、ススキや多くの希少種を含む多様な植生。小生が大好きだけど上ノ原にはないワレモコウも沢山。そして何と、管理地の一画には



今や幻のムラサキ自生地が！近年は酪農衰退による管理放棄や植林などで森林化が進み、草原は消滅寸前であった由。頑張れ、茅ポッチの会！来年の6月ムラサキの花咲く頃と、その前の2月メープルシロップ作りの頃にも、と再訪を約したことであった。

(2)9月24日。川端さんと訪れたのは滋賀県高島市にある「くつきの森」(146㍏)。市から委託され、**NPO 麻生里山センター**(海老沢秀夫理事ほか)が管理している。かつては、水田や薪炭林、ホトラ山(草刈り場)であった。その後、減反政策や化学肥料の普及、エネルギー革命により管理放棄が進む一方、スギやヒノキの植林が行われた。各地に普通にあったホトラ山も、草地として残っているのはわずか4㍏と往時の半以下に。そこが今、シカの食害に直面している。ワラビやマツカゼソウ、ダンドボロギク、などシカが嫌う草花が支配層を形成。海老沢さん曰く「ここはシカが作った草原です」と。現場に行っ



て見ると、シカが食べ残したワラビをイノシシが根こそぎひっくり返していた。管理放棄+シカ害+シシ害。ヘレンケラー並みの三重苦！我々上ノ原での悩みなど大

したことない、と思ひ知った。

(3)9月26日、島根県大田市へ。**NPO 緑と水の連絡会議**(高橋泰子理事長)のメインフィールドは名峰三瓶山麓に広がる西の原(約100㍏)。草原内を走るクロカンコースが野焼きの防火帯になっていたり、ノシバの広場がグラウンドゴルフ場になっていたり驚きの連続。中でも注目は、カヤの生産・販売システムづくり。地元の若手茅茸職人と組んで、耕作放棄地の茅場化



による新たな経済価値の創出を目指している。他にも、市民ぐるみの外来種駆除活動など学ぶべきところ極めて大なる視察だった。

●**上ノ原は森になっていた！** 茅刈りが終わった10月25日～26日、地元の皆さんを対象とした平原さん(東京農工大院生)のヒアリングに同席。三郎さん曰く「青水さん達が来て野焼きや茅刈りをやってくれなかったら、上ノ原は今ごろ森になっていた」。そうだったかもと、来し方10年余の歳月を振り返り感慨ひとしお。



●**茅出しが一番助かります** これは、「青水塾の活動で、何かありがたいことがありますか」に対する惣一郎さんご回答。塾のプログラムの中で最もハードな作業だが、改めてやりがいを感じ元気もらった。その伝で言えば、地域に共通して喜ばれるのは雪掘りかも。

●**若者たちに託す物産直売所の夢** ヒアリング終了後、久保の物産直売所へ。「お散歩マルシェ」開催期間中で、伊藤さん夏目さんが交代でお店番。地元の皆さんご自慢の野菜や漬物が所狭しと並んでいる。虎豆や吊るし柿など



に財布の紐が緩む。何といっても、ここは地の利がある。「藤原地域丸ごと博物館」のコア施設にピッタリ。ヒアリングにも協力してくれたお二人に、その夢を託したい。

●**上ノ原の茅が世に出る！** 11月14日～15日。いよいよ、茅出し作業。町田工業さんのトラックに積み込み、引き取ってもらい、やがてお国の文化財の屋根となって世に出る。つまり茅出しは、再生した茅場が経済的・文化的価値を持つことになる最後の詰め作業。正直、後期高齢の身にはきつい。でも、今年も良い汗をかくことが出来て良かったと旨酒交わすのであった。



2015年11月27日(青)

～編集後記～

『茅風通信』No. 47号をお届けします。今年も無事に「茅刈り」そして「茅出し」を行うことが出来ました。また、伐採、搬出したミズナラで炭が焼かれ、「日光茅ポッチの会」のフィールド視察や交流会など、活動の輪も広がっています。本当に素晴らしいことですが、その成果の一端を『茅風通信』で報告できるのも嬉しい限りです。地元の皆さまをはじめ、森林塾青水を支えて下さる方々に心より感謝します。来年も稔りある年となるよう、よろしく願い申し上げます。(編集子)